

桐朋学園大学大学院 修士課程

修了演奏発表

<大学院修士課程2年>

ピアノ

2019年1月21日(月) 9:30開演 (9:00開場)

桐朋学園大学 調布キャンパス C008教室

【9時30分～】

岸田 武士

共演者：倉又 遥

Johannes Brahms

Sechs Gesänge Op.3

1.Libestreu

6.Lied

Klaviersonate f-moll Op.5

ブラームスは、3曲のピアノ・ソナタを作曲したが、これらは全て初期に書かれ、また同時期に作品3、作品6、作品7の歌曲集が生み出された。

《ピアノ・ソナタ第3番 へ短調》作品5は、1853年10月にデュッセルドルフで完成されたが、第2楽章、第4楽章はそれ以前に手掛けられており、この後に第1楽章、第3楽章、第5楽章が書かれた。

初演は、第2楽章、第3楽章を1854年10月23日にライプツィヒにて、また全曲は1854年12月にマグデブルクにて行われた。演奏者はクララ・シューマンとハンス・リヒターであった。

このソナタは1854年2月に出版されたが、ブライトコプフ・ウント・ヘルテル社から出版された《ピアノ・ソナタ第1番》や《ピアノ・ソナタ第2番》とは異なり、ライプツィヒのバルトルフ・ゼンフ社（1907年にジムロックに売却された）から出版された。

ライプツィヒのイーダ・フォン・ホーエンタール伯爵夫人に献呈されている。この《ピアノ・ソナタ第3番》はシューマン夫妻と出会ってから作曲された作品で、出版に際しては、シューマンがその仲介をした。

この作品には、ベートーヴェンやシューマン、メンデルスゾーンの作品の研究結果が非常によく表されていると同時に、後期の作品の特徴の一つでもある3度下行の旋律（例えば《4つの小品》作品119）が第2楽章の冒頭に出てくることも非常に興味深い。これは、ブラームス独自の和声感や表現法が、既にこの《ピアノ・ソナタ第3番》から始まっていることを意味するものでもある。

全5楽章で構成されているこの作品は、どの楽章においても他の作品、例えばシューマンの《ピアノ・ソナタ第3番 へ短調》作品14の第1楽章や、ベートーヴェンの《ピアノ・ソナタ第23番 へ短調》作品57の第1楽章から、音形やリズムの借用が見て取れ、それらの動機が全曲を通して随所に展開されており、ブラームスのソナタ形式へのこだわりが強く感じられる作品である。

Berg Sonate für Klavier h-moll Op.1

Debussy Préludes 2

私は修士論文『ドビュッシーとイギリス——「前奏曲集」における英国趣味——』にて、『前奏曲集』を通してドビュッシーとイギリスの関係性を調査した。そのため、修了試験の曲目に『前奏曲集』第二巻を選択した。ドビュッシーは第二巻にて新たな書法を試みたが、同時代の革新的な作曲技法を編み出した作曲家には、シェーンベルクやその弟子であるベルクらが挙げられる。修了試験では、『前奏曲集』と同時代の代表的な作品であるベルクの『ピアノ・ソナタ』を並べて演奏することにより、双方の比較を試みた。

クロード・ドビュッシー Claude Debussy (1862-1918) の『前奏曲集』は、第一巻が 1909 年から 1910 年、第二巻が 1910 年から 1913 年にかけて作曲された。第一巻が 1909 年から翌年 2 月にかけての短期間で作曲されたのに対し、第二巻は 3 年と長い期間がかかっている。何故ならば、この頃ドビュッシーが書法、様式において新たな境地を切り開こうとしていたからだ。第二巻は第一巻と比べ、すべての楽曲に三段譜が使用されている。また前奏曲集は国の景色、文学、伝承など様々な題材からインスピレーションを得ているが、第二巻第 1 番『霧』や、第 11 番『交代する 3 度』には、この後に作曲された『12 の練習曲集』(1915 年) を先取りしたような音型、音程という素材そのものへの関心が見られる。特に前者はストラヴィンスキーのバレエ音楽『ペトルーシュカ』に接したことがインスピレーションの源になったとされている。このように、ドビュッシーにおけるピアノ曲の重要な作品の一つである前奏曲集の中でも、第二巻では特に革新的な手法を試みている。

アルバン・ベルク Alban Berg (1885-1935) の『ピアノ・ソナタ』(1907 年) は、ベルクが生前発表した唯一のピアノ曲である。臨時記号は h-moll と表記されており、提示部、展開部、再現部と古典的なソナタ形式に則って作曲されているが、四度音程の堆積や半音階、全音音階を多用しており調性感は安定せず、関係調への転調なども無い。また作曲当時に師事していたシェーンベルクがブラームスの楽曲に用いた「発展的変奏」の原理に基づいて作曲されていると見られ、冒頭の主題動機から様々な動機を派生させ、楽曲全体の統一感を生み出している。素材が非常に限定されていることから、冒頭の動機が常に展開しているかのような様相を呈している。

Schubert

Sonate Nr.21 B-dur D960

私にとってシューベルトは、触れていて素直な自分になれる存在です。それは、シューベルトのそっと佇んで寄り添うような優しさが、そうさせてくれるのだと感じます。その優しさは、彼が孤独を誰よりも知っていたがゆえに、真に人の心に染み入るのです。

しかしまた、触れるほどに、自分が捉え逃していたものにふと気づかされることがあります。こちらが静けさをもって耳を傾ける時初めて、シューベルトのささやきを聴きとることができるのでしょうか。彼の音楽は、現代の私たちが忘れていた、寄り添うということはどういうことなのかを教えてください。

彼の早すぎる最晩年に書かれた3つのソナタの1つであるこの作品は、全編が祈りとしか思えないほどの静謐さに満ちています。そして、歌。孤独と表裏一体の優しさが、言葉のない歌となって、聴く者の胸にどこまでも染み渡ります。

第1楽章 Molto moderato B - dur

奥深い響きの主要主題、悲哀に満ちた二重唱に始まる副次主題。長大なこの楽章全体が、心の最も深いところから溢れ出る歌に満ちている。大胆な転調、和声の変化は音楽に濃やかな陰影を与え、繊細な心の移ろいがゆったりと綴られてゆく。随所で聞えてくるバスのトリルは、シューベルトの心を離れることのない絶望なのだろうか。

第2楽章 Andante sostenuto cis - moll

孤独の極み。脈打つオクターブの分散音型が貫くなか、絶望と一条の望みが交錯する。中間部でのイ長調の歌は、そのあたたかさゆえに一層孤独感を深める。回帰した主部では、付加されたバスの音型が逃れられない運命のように執拗に繰り返される。しかし突然の転調によってそれが歌と溶け合い、やがて同主長調で静かにその運命を受け入れてゆく過程はあまりにも悲しく美しい。

第3楽章 Scherzo, Allegro vivace con delicatezza B - dur

天上の世界で光が躍る、繊細で一点の曇りもない透明な世界。シューベルトらしい陰影にも富んでいる。しかし、リズムが特徴的なトリオでは、バスのアクセント、とりわけ最低音のF（当時のピアノの最低音）が炸裂し、絶望の淵を覗かせる。

第4楽章 Allegro ma non troppo B - dur

突然のG音で開始し、軽快な主題に続くが、そのG音に再び寸断される。伸びやかな歌、激情をたたきつける場面などを挟みながらも、主題はやはりG音によって阻まれる。最後にはG音が半音ずつF音まで下がり、出口が見えたかに思われるが、ふっと音楽が途切れる。突如プレストのコーダとなり、駆け下り駆け上り一気に終わる。この突然の幕切れは、結局はどこにも逃れられないというニヒリズムにも感じられる。

Chopin Prelude Op.28

Scriabin Piano Sonata No.5 Op.53

ショパンのプレリュードは1838年から1839年に作曲された。この曲はバッハの平均律の影響を受け、24の調を全て使用しその配列もまた平均律と同じ構成である。

24の曲はショパンの作品それぞれを凝縮したかのように様々な性格を持っている。例えば第6番は舟唄、第7番はマズルカ、第8番、第12番、第16番などはエチュード的であるし、第14番の両手がユニゾンで動く様は、ピアノソナタ第2番の終楽章を想起させる。

また1曲1曲はそれぞれ短いものの、それでいて含蓄に富んでいることからか、第7番はモンポウ、第20番はラフマニノフ、ブゾーニがテーマとして用いバリエーションを書いている。

ショパンの次に演奏するのは、そのショパンの影響を色濃く受けたスクリャービンである。スクリャービンは初期と後期では作風が大きく異なる事が特徴的だが、初期の頃はショパンの前奏曲と同じ調、配列で1888年から1896年に前奏曲を作曲している。

スクリャービンのピアノソナタ第5番は、初期から中期に移り変わった1907年に作曲された。スクリャービンは1900年頃から曲調は調性感のあるものから徐々に無調へと変わっていくが、彼の9曲あるピアノソナタの内、第5番はちょうど調性の有無が曖昧でその変化の境目とも言える。また第5番の冒頭には、交響曲第4番『法悦の詩』の中でスクリャービン自身が作詞した詩が一部引用されているが、この詩の内容から彼が神秘主義に傾倒していた事が伺える。

“神秘の力よ！ 私は今、お前を呼びおこそう。創造的精神のうす暗い底に沈む生命のおびえた影よ。私はお前に、勇気を授けよう”(平井丈二郎訳)

単一楽章で、Fis-dur から始まり様々に転調した後に Es-dur で終結部を迎える。

<ご来場の際のお願い>

音楽部門の警備室にて、お名前を確認できるものをご提示頂きます。

ご提示のない場合や定員を超過した場合は入場をご遠慮頂く場合もございます。

<試験のため、以下の諸点についてご注意いただきたくお願いいたします>

(1) 写真・ビデオ等の撮影・花束贈呈・演奏中の入・退場

はご遠慮ください。

※演奏者交代時等演奏の合間の入・退場は係員の指示に従ってください。

(2) 小学生低学年以下のお子様の入場はご遠慮ください。

(3) 会場内では携帯電話およびアラーム時計等の電源をお切りください。

(4) 採点員席への立ち入りは固くお断りします。

今後の修了演奏発表日程

1月22日(火)	9:30～	調布キャンパス C008 教室／仙川キャンパス S333 教室
1月23日(水)	9:30～	調布キャンパス C008・C001 教室
1月24日(木)	14:00～	調布キャンパス C008 教室
1月26日(土)	13:00～	調布キャンパス C008 教室

曲目等詳しいご案内は こちらまで

<http://www.tohomusic.ac.jp/college/graduate/concert.html>

—ご来場をお待ちしております—

桐朋学園大学大学院
電話 042-444-7055 (調布キャンパス代表)
FAX 042-444-7056